

令和4（2022）年度 第1学期始業式 式辞

駒場東邦生諸君、おはようございます。

コロナ禍の影響下で迎える、3度目の年度初めです。第6波といわれた今回も、第5波の時のように急速に収束していくのではないかという淡い期待がありましたけれども、現実はいわゆる高止まり状態が続き、すでに新たなピークに向かっているのではないかという見方すら示されるようになってきました。本校においても、残念ながら生徒諸君の感染確認が続いており、学校における活動中に感染したと疑われるケースも複数認められている現状です。

そのような中で、東京都においては、先月21日に「まん延防止重点措置」が解除され、その後のおよそひと月を「リバウンド警戒期間」とするとの方針が示されました。ひとり一人に呼びかけて感染防止策を徹底することによって、感染の拡がりを抑えようという意図であると思われませんが、人流は確実に増加して感染状況は厳しい水準にとどまっているわけです。それでもやはり、人々の暮らしを様々な側面から考えるに、本当にギリギリのところに差しかかっていたのだらうということが想像され、ある程度の緩和は致し方なかったと言わざるを得ないのかもしれませんが。世界に目を転じれば、さらに極端に緩和している例も見られ、それは驚きを禁じ得ないところですが、一方で厳しくロックダウンしているところもあるわけで、このパンデミックにおいては、国や地域によって事情がかなり違ってきており、この見方がスタンダードであるということが言えなくなってしまったのだらうと思われまふ。日本においても、先日の厚労省の専門家会議において、地域差が認められるとの見解が示されたばかりです。

とすると、私たちも、置かれた状況と私たちなりの課題とを見極めたうえで、独自の判断を下していく必要性がますます高まってきているということなのかもしれません。たとえば体育祭に関しては、今まさに6年生諸君が様々な観点から検討を重ねてくれています。一昨年は中止となり、昨年は様々な対策を施しつつ開催に漕ぎつけたという経緯をふまえて、今年はどこまで可能性を追求することができるのかを考えていくことになるわけです。さらに安全性を確保するためにはどのような対応が求められるか、一方で、受け継いできたものを発展性のある形で継承するためにはどこまでやるべきなのか、そして、それらの試みと実践から皆さんはどのようなことを学んでいくことができるのか——、ここまで考えると、実に多岐にわたる側面についての検討が必要となってきて、本当に難しい判断になるのです。前例踏襲という姿勢では到底追いつけません。もちろん、私たち教員は、その責務としてこの難しい問題に取り組んでいきますが、ここは駒場東邦ですから、生徒諸君の主体的な取り組みに期待するところは大きいのです。それがあるとないのでは、成果の実感には雲泥の差が出てきます。ひとり一人が主体性をもって臨むことで、そこから得る学びを実感してほしいと思います。これはもちろん体育祭に限ったことではなく、林間学校などその他の行事や、合宿を含めた部活動のあり方、そして何よりも、毎日の授業を中心とした学習活動についても求められてくる場所です。それは、いつもうまくいくものではありません。もしかしたらうまく行かないことの方が多いかもしれない、それでも、その取り組みから得る学びには喜びが伴うものであることを信じて、共に力を尽くしていきたいものです。

年度初めですから、先行きが不透明でも、少し力んで、精一杯前向きなことを述べました。それでも、昨年度末の終業式で述べた「語ることこそが人を救う」ということも、どこか心の片隅に置いておいていただきたいと思うのです。難しい局面において当事者意識が殊更大事であるのは言うまでもありませんが、ともすると

孤独に陥るスポットがあると思われるからです。

そんなことを考えながら春の日を過ごす中で、私は、ある若い詩人のエッセーに出会いました。2009年、高校3年生の時に詩壇の芥川賞といわれる“中原中也賞”を受賞して話題となり、一時〈JK詩人〉などともてはやされた文月悠光(ふづきゆみ)さんが、ある雑誌に寄稿した『詩を求めるとき』と題された文章です。それは、「人生には詩が必要だ」という一文から始まり、「何のために詩なんて読むのか」という疑問に答えるという趣旨で綴られています。文月さんは、私たちが普段外部の情報にばかり気を取られ、苛立ったり熱くなったりしても、そのような“自分の感覚”に注意を向けることはまれであることを鋭く指摘します。そんなとき、詩を読むことは、「今の自分を知る」手がかりとして機能するというのです。詩の“内容”が理解できなくてもいいと述べつつ、詩の言葉を素直に受け取れば「ささる一行」や「心地よい音のひびき」が見つかるだろう、そこから「今の自分」の心の状態が見えてくると言うのです。それは、「ふがない自分」であったり「繊細すぎて殻にこもる自分」であったり、つまりは醜く自己嫌悪に陥る自分なのであり、それが詩の中で丁寧に言語化されていると論じます。そして、自分では「きたない」と切り捨ててしまいそうな認めがたい感情を、詩はその言葉の中に静かに受け入れてくれる、と文月さんが言い進めるにいたって、私は、前述した「語ること」と同じ効果を、「詩を読むこと」に見出した気分になりました。

エッセーの最後に、『普通に生きる』ことの難しさとままたまならなさを感じる時、詩はそのつらい気持ちの「吸収剤」になる、と述べているのを読んで、ますますこの若い詩人に興味が湧き、詩作品もいくつか読んでみました。中でも、『泣く大人』という作品は、印象深く私に入ってきました。まず、冒頭の「捨てられないぬいぐるみ」という言葉がささりました。それはまさに『大人になる』と言い聞かせても、どこか信じられない」という心の状態をひとことで言い表すもので、さらに『子ども』であることを押しつけられて／うっとうしくも受け入れてきた」と続けられると、ドキッとせずにはいられませんでした。つまり、もう大人なんだから「自由にしなさい」と言われ、戸惑っている状態がここには示されているわけです。そして、大人という「上着」は寒い風を通してしまって、案外便りないものであることを感じ、言葉なく涙するのですが、その涙が「こんなに暖かいんだ」と気付くところで、詩は閉じられているのです。子どもの時は泣かなかったのに、声も出さずに「泣く大人」が、歯を食いしばって冷たい風の中を歩いて行こうとするのを、こんなに近くに寄り添って暖かく支える言葉があるのだなあと感じました。

そう、この4月1日から、成人年齢が18歳に引き下げられましたね。ネットニュースから若者の声を拾ってみようと検索したところ、それにはなかなか行き当たらず、消費者庁や経済産業省に加えて各自治体が、こぞって「大人になると危ないことがたくさんあるよ、注意しなさい!」と喧伝しているのにぶつかって、なんとも言えない不条理を感じました。そんなときに、文月さんのこの詩に出会って、心底からホッとするとともに、コロナ禍の厳しい状況でもしっかり頑張っていこうという気持ちが“カミ”だったとしても、支えてくれるものの存在を確認した思いになりました。

皆さん、力を尽くしてまいりましょう。

以上をもって、式辞といたします。

令和4(2022)年 4月8日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦